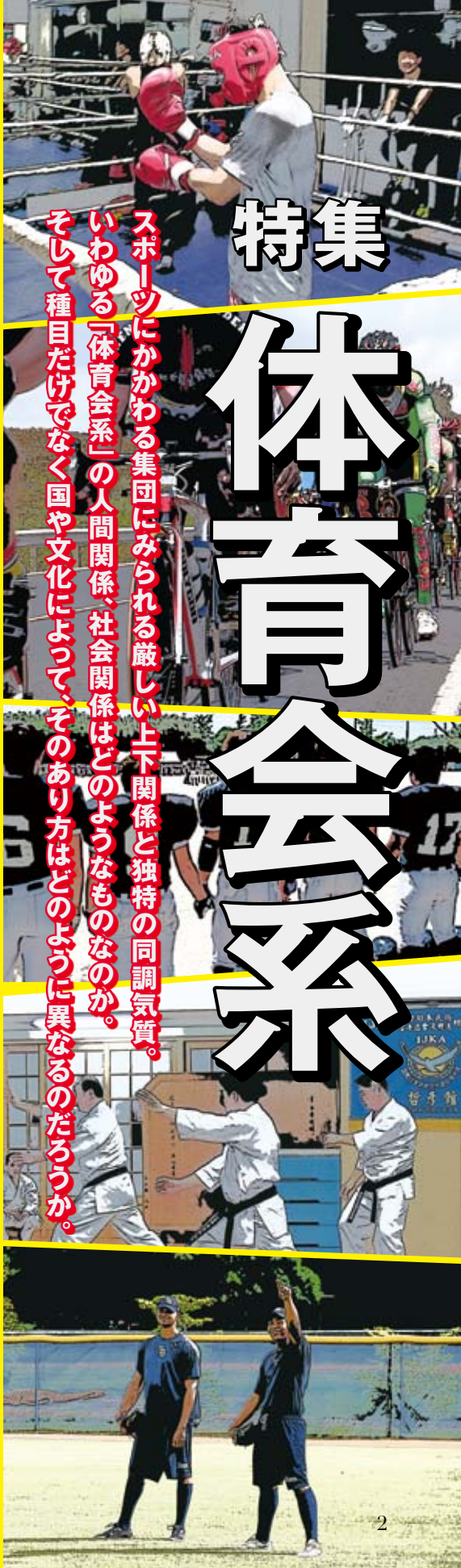


特集

体育会系

スポーツにかかわる集団にみられる厳しい上下関係と独特の同調気質。いわゆる「体育会系」の人間関係、社会関係はどのようなものなのか。そして種目だけでなく国や文化によって、そのあり方はどのように異なるのだろうか。



体育会という 日本文化を考える

瀬戸 邦弘 鳥取大学准教授

表象としての体育会(系)

「体育会(系)」。この不思議なことは、特に就職活動や会社組織などにおいてよく用いられるが、この場合、「大学の体育会運動部出身者とその性質」を指すことになる。彼らは「体力があり、打たれ強い」「上下関係がしっかりしている」などと評され、組織の良き戦力として期待されることになる。一方で、このことには「馬力だけはある」「単純で使いやすい」など彼らを使い減りしない

値と同時に日本人の理想を実現するために、日本社会に適合するように変容してきた。体育会運動部とは、まさにその過程で形成されたひとつの日本文化醸成装置ともいえる。

「祭祀集団」としての運動部活動

体育会運動部では国際スポーツに見る合理性や効率性が求められるより、むしろ「伝統」という慣習や形式を遵守すること、「魂」などといった精神の継承や思想的価値の共有が重要な成立要件となる。そのために部員は構成員になるために、いわば通過儀礼的過程を求められることにもなる。多くの伝統校運動部には独自のしきたりが存在し、決して合理的とは言えない練習方法や、過度の上下関係の構築など独自の行動倫理が求められる

便利な存在として揶揄する意味合いも含まれる。いずれにしても、良くも悪くも「体育会(系)」というカテゴリーが日本社会に存在し、常に注目されていることに間違いはない。「体育会(系)」とはいったいどのようなものなのだろうか。

世界基準の価値と日本人の理想

一般的に「スポーツ」ということは、オリンピックやワールドカップなど国際大会を頂点とする枠組みにあるものを指す。これらは世界共通のルールに基づく二元的な広がりであり、国際スポーツともよばれる。

ところで、そもそも我が国においてスポーツは明治期に輸入された外来文化のひとつであり、「近代的身体」をおしてあらたな価値を伝えるツールとして重要な役割を果たしてきた。現在でもそれらはポーターレスな国際社会で共有される理想

る。一見不合理に見えるそれらは、じつは「祭祀集団」ともいえるコミュニティ形成のために必要ないわば儀礼となるのである。

「理外の理」としてのスポーツ

スポーツライター藤島大は早稲田スポーツの系譜を評して「理外の理」ということばを用いたがこれは言い得て妙である。

早稲田大学競走部の名将中村清は、ときに練習場の砂を食みながら力説するなど、伝説的な指導法で有名であるが、それは彼なりの必然性が導き出した方法なのかもしれない。一見すると中村の指導法は科学的合理性から外れ、破天荒なものとして映るかもしれないが、じつは彼は科学知(エビデンス)に基づく最新のスポーツ指導法を誰よりも研究していた人物でもある。つまり、彼は科学知の有効性を理解しながらも、早稲田入スポーツという日本独自の学生スポーツ文化形成のために必要な「合理性」を紡ごうとしていたことになる。ところで「理外の理」を体現するのは何も選手や指導者ばかりではない。例えば、学生応援団なども一見すると合理的でない練習や所作を墨守し、時代錯誤などと揶揄されることも多い。しかし、そこにはやはり彼らなりの「理」が存在し、必要な活動が実践されることになる。荒唐無稽な日々の鍛錬はすべて、応援団文化のための「修業」なのである。

近代日本の記憶

ところで、興味深いことに、じつは「体育会(系)」を必要とする実社会の側も「泥臭さ」や「粘り強さ」など体育会で形成される資質を学生の内に求めて

である「健全、健康、平等、平和」などを具現化する任を期待されている。すなわち、スポーツとは常に社会の理想を実現するための希望を託される存在ともいえる。また、それらは世界基準の価値



負けられないライバル対決。アメフトの試合前(於：上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会)

おり、それは、古くからの企業文化や社会全体のあり方と体育会の親和性が高い事を意味している。またその親和性の高さは社会全体にも言え、例えば、各種メディアも体育会文化を常に注目し、それらは重要なコンテンツとして利用されている。

昭和の「スポ魂アニメ」然り、また、現在では正月の風物詩として定着している「箱根駅伝」のテレビ放映もその典型といえる。「箱根駅伝」では、画面に映るランナーとOBたちとの心の繋がりが、部員間で共有される思い、そして各選手を中心として同心円状に広がる家族や地元の仲間との「絆」が強調され、その中心にいつも伝統で繋がる「禪」が配される構図が巧みに用意されている。正月という日本の伝統的風景のなか、日本人の集合的記憶と巧みに結びつけられた体育会的世界観が、よき日本の伝統世界として消費されているのである。

このように、近代以降の日本や日本人を形成する途次で体育会文化はある意味で大きな役割を果たしてきたともいえる。そう考えると、体育会自体がまさにひとつの日本文化であり、体育会の系譜とはまさに近代日本の記憶ともいえるだろう。



上智大学応援団の夜間練習風景

黒帯のムラ社会

—白線黒帯びる男と女の境界線

溝口 紀子 みなぐちのりこ 静岡文化芸術大学准教授

今年八月、第三回リオデジャネイロ五輪が開催される。日本柔道にとって、三年前に女子柔道強化選手による暴力告発問題から端を発したクライシス以降、初めて迎える五輪。「本家」の日本チームの活躍は今まで以上に注目されている。

ここでは「本家」の伝統を受け継ぐ日本柔道のなかでなぜ「暴力文化」を容認してきたのか、その独特な規律や文化を考えてみたい。

頂点に立つ者は

日本の柔道の特徴として、段位制度（黒帯／赤帯）、嘉納治五郎思想、白線黒帯（女子柔道）の三つがあげられる。

まず、段位制度とは、初段から十段までと競技成績だけでなく、形の試験、修行年数、競技成績などによって昇段するシステムである。修行年数が長い高齢者に与えられる赤帯を頂点に独自のヒエラルキーが存在する。上意下達の社会では高段者を「先生」とよび、同門の先輩には「先輩」と敬称を使用し異敬の念をもたなければならぬ。一方、競技生活は修行とみなされ、選手は指導者や競技団体の幹部からのさまざまな暴力やハラメントを受容し耐え忍ぶ。現代においても旧態依然の階級社会が柔道界には存在していたといってもいい。

この独特な階級制度の頂点に在るのが講道館柔道の創始者、嘉納治五郎である。嘉納は「日本のクーベルタン」といわれ、日本近代スポーツの父であり、教育者、政治家でもある。ちなみに嘉納は「無段」である。その理由は仄聞したところによると創始者である嘉納は、頂点に君臨するの段を与えられるのではなく、与える立場であるからといわれている。この嘉納の思想「精力善用自他共栄」こそが、段位制度の中心であり、今日の柔道の崇高な哲学として継承されている。

それではなぜ嘉納の思想のもとで体罰が横行していたのだろうか。嘉納が掲げた「精力善用自他共栄」の理念の内的必然性は、自己制御された精力を善用（恩返し）することで、超越的師弟関係を築き自他共栄（ファミリーの繁栄）を導くというものである。とはいえそれは、内部において融和的であるが、外部の社会においては閉鎖的、閉性ももち合わせている。段位制度という序列社会のなかで、超越的師弟関係を築かれ上意下達の物申せないなかで、暴力は容認され、さらに勝利（金×タル）至上主義によって受容されていた。

横たわる白線

冒頭の女子柔道選手らへの暴力事件のように、かねてより暴力は常態化していた。とりわけ柔道

界では圧倒的に男性優位であり、女性は常に弱者であり異端者でもあった。その象徴が白線黒帯である。女性は、男性とは異なる別の段位制度におかれ白線の入った黒帯を締めなければいけない。それは男の階級社会との境界線という寓意を含んだ線でもある。

ムラよ開け

閉鎖的な組織（ムラ社会）では、「見ざる、聞かざる、言わざる」が習慣し問題を顕在化せず隠蔽しようとする傾向がある。とりわけスポーツ競技団体は序列意識が強く団結力の強い集団であるから閉鎖的になり易い。

このムラ社会を打破するためには、その逆の手法で、見せる（可視化）、聞く（傾聴）、発言する（言語化）を、組織のなかで日常的に実践していくことである。そのことによって、組織の自浄能力が高められるのではないだろうか。これは昨今の企業や公益団体などの不祥事から垣間見えるように、スポーツ界だけでなく現代社会でも同様に見えるのではないだろうか。



日本人女性だけが身に付ける白線黒帯。著書『性と柔——女子柔道史から問う』河出ブックスの表紙。

師弟を結ぶもの、分かつもの

—台湾の空手社会

台湾の空手会派

台湾の空手は、一九六二年、台湾人の武術指導者と日本人の空手指導者が協働して、空手道場を開設したことに始まる。一九七二年には、両名の尽力で公益法人の競技団体が認可されている。こうした経緯から、現在の台湾の空手指導者の約九割が、両名の系譜に連なるといわれる。空手社会では、こうした同じ系譜に連なる人ひとが集まってつくる活動団体を会派とよぶ。台湾では、一会場一會派、一指導者一會派といった小會派が林立し、大きな會派でも指導者は数名程度だ。空手人口が違つから単純に比較できないが、日本では、指導者が数百名を超える大きな會派が多数ある。独立する指導者は、「のれん分け」してらつて、會派に留まることが多いからだ。

師弟関係と葛藤

台湾には、「拝師」という伝統的な規範がある。師弟を父子とみなし、弟子が師への忠節を守るといふものだ。ただし台湾の空手指導者たちは、そうした規範には、さほど意味がないという。台湾では、空手に限らず弟子の独立の気風が高いとされる。一方、師は弟子の独立をよしとしない気風もある。だから弟子の独立には、葛藤を伴うことがままある。台湾の空手社会で小會派が林立しているのは、弟子が独立に際して、「のれん分け」してらつて會派に留まることより、まったくの独立を望んで、葛藤を経たか、あるいはそれを避けようとして、師と袂を分かつことが多いからだ。師弟関係は、もともとこうした葛藤をはらんでいるから、「拝師」は、



台湾の空手道場にて。左から6番目が筆者

さほど意味がないということになる。

こうした葛藤を避けるための伝統的な慣行がある。「留一手」といい、「弟子の離反を防ぎ、今いる弟子を引き留め、あらたな弟子を得るために、師の技の奥行きを不鮮明にする」ことだ。師が拝され続けるためには、技を秘匿しなければならぬのだ。

小林 貴幸 こばたかゆき東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
シニア・フェロー

結び、分かつもの

数年前、台湾のある名門道場で大切に育てられた指導員が、首席師範に無断で、日本の空手会派に移籍して道場を開き、その日本の会派を巻き込んだ騒動をおこした。指導員は、かねてから独立を希望していたが、首席師範が独立を許さず、かえつて「留一手」によって技を教えてもらえないことになった。そこで首席師範に無断で移籍・独立したのだという。首席師範は、「留一手」を公言し、伝統的な規範をもち出して、弟子筋や関係者に通知した。だが、人びとと当事者二名との関係は、以前と変わらず、かえつて指導員は、競技団体であらたな役職を得ている。日本の空手社会であれば、第三者の目が厳しいから、師弟のどちらかが村八分になったり、競技団体から干されたりしているところだろう。

台湾人のある空手指導者は、「拝師」の規範は、守らなければならぬ。そのためには「留一手」が必要な場合もある。でも独立したいという個人の希望も大切だし、周りもそれを認めてくれる」といふ。「拝師」や「留一手」は、師弟を結び、また分かつ。周りの人びとも含めたそれらの意味から、台湾の社会関係が見えてくる。



上下関係とは無縁なドミニカの選手たち。ドミニカ共和国のタンパベイ・レイズのアカデミーにて



同室の選手の脈をさる。ドミニカ共和国のタンパベイ・レイズのアカデミーにて

共同体を支えるもの

窪田 暁 奈良県立大学専任講師

ないだろうか。勝利至上主義に立てば、部員間の統制の乱れは、チームプレーが重視される競技のマイナスイメージとして働きかねない。そのため、日ごろから監督を頂点とした命令系統を部員全体に徹底させる必要があり、上下関係というルールがその役割をこなしてきたのである。そこには、こうした経験をおして社会性を身につけていくのだという思想が存在し、長らく教育現場におけるアマチュア野球を支えてきた。そして、ここで培われた精神性がプロ野球界にも引き継がれているのである。

究極のプロフェッショナルリズム

一方で、海外の野球強豪国には日本の体育会系にあたるものがない。ドミニカ共和国は、アメリカの大リーグにもっとも多くの選手を送り出す国として知られているが、その秘密は、大リーグ全三〇球団が設置するベースボールアカデミーにある。スカウトが才能のある少年を発掘し、球団の基準にあった選手だけをアメリカに送り出しているのである。アカデミーには、一七〜二一歳までの選手が四〇名ほど在籍している。四人一室のドミトリで寝泊まりし、一緒に食事をして、練習する。全寮制の野球部と同じである。にもかかわらず、そこに「擬似共同体」が生まれることはない。

それはすべての選手がプロ契約をむすんでいることと関係する。大リーガーになるのが最終目標である彼らにとつて、アカデミー内の規律や社会関係は意味をもたない。それよりも個人として成功を勝ちとり、出身地の「共同体」を養っていかねばならないと考えているからである。まさに、「プロフェッショナルリズム」の極致ともいえるべきであろう。

日本社会には「あの人は体育会系だ」という言いかたがある。礼儀正しい人、辛抱強い人という意味で使われる一方で、年齢をはじめとした上下関係に固執する人という否定的なニュアンスで使われることもある。ひよっとしたら、その矛先は、体育会系に宿るアマチュアリズムが醸し出す「いやな感じ」に向けられているのかもしれない。

体育会のしきたり

わたしが体育会系の洗礼を受けたのは中学生のときである。野球部の監督に体育大学を卒業したたの教員が就任し、練習初日に「来週までに全員、丸刈りにしてこい」とのたまったのである。「丸刈りにしてもホームランを打てるようにはならないのでは？」との反論は無視され、最後まで抵抗した数名の部員にレギュラーの座があたえられることはなかった。

大学であれ高校であれ、私立の強豪校では全寮制が一般的である。寝食をともにすることで、礼儀作法をとおして上下関係を学んでいく。あいさつにはじまり、ことばづかい、食事や入浴の順番、トイレ掃除から使いつぱしりにいたるまで……。しかし、こうした閉ざされた「共同体」における上下関係がエスカレートすると、ときに上級生から下級生への体罰というかたちに変質することもある。

かくも理不尽な習慣がなくならないのは、目先の勝敗にこだわるためでは

汗は嘘をつかない

萩原 卓也 日本学術振興会特別研究員（京都大学）

ケニアで自転車競技？

野生の王国、マサイ族、マラソン選手。「ケニア」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべるだろうか。ケニアは首都ナイロビ郊外に、自転車競技選手育成を目的とする団体がある。

ここでいう自転車競技とは、細いタイヤの自転車公道をさつそつと駆け抜ける競うスポーツのことである。そこでは、地元の若者一五人がトタンで作られた長屋で共同生活を営み、自転車競技選手として生き延びようと奮闘している。

賞金のために、生活のために

ケニア国内の失業率は日本では想像できないほど高い。日本円にして一日数百円を稼げる建設現場で雇ってもらい、その日暮らしができればまだよい。

この団体に所属する若者は自転車の修理工として日銭を稼いでいるが、彼らが喉から手が出るほどほしいのは、各大会で成績優秀者に与えられる賞金である。賞金はときに十数万円。自転車レースはチームの戦略がものをいうが、この団体は賞金をチーム内で分配しないため、賞金は獲得した選手個人のポケットに入る。彼らは大金のかかった試合の前ほど、わかりやすく目の色を変えて練習に励む。



ケニアにおける自転車レースの様子

しかし、同じように努力したからといって、誰もがみんな勝てるわけではない。運もある。なぜあいつだけ！あいつは傲慢だ！自然と不満や嫉妬が蓄積されていく。お金に振り回され、チームメイトとのぎくしゃくした関係のなかで流れる彼らの汗は、なにか濁っているようにわたしの眼に映っていた。

一緒に走って、一緒に疲れて

たがいに不満や嫉妬が絶えないにもかかわらず、不思議とチームの分裂には至らない。事実、この団体は地域に根ざして二〇年以上も活動を続けることができている。では、何がそうさせているのか。その手がかりは、一緒に走って一緒に疲れるという、一見些細な出来事にありそつだ。

持久力を競うという自転車競技の性質上、練習は一日一〇〇キロメートル前後を走る。練習中は、縦二列の集団走行が基本である。自転車は平地での巡航速度が速いため、集団の先頭を走る人は強烈な風圧を受けることになる。同じ人が先頭で力

を消耗してしまわないために、先頭を順々に交代することで負担を分担する。これは相補的かつ協力的な関係性を彼らに要求する。また、練習後は疲労にまかせ、みんなで一緒に寝転がって、そうするほかどうしようもない身体を休ませる。

本来であれば個人的な出来事と思われがちな「疲れる」という現象が、みんなの出来事として身体に沈みこみ、そして共有されていく。この積み重ねが、彼らを自転車競技団体の一員としてそこにまともな要因ではないだろうか。

彼らは特定の個人について不満を語ったあと、決まってこう付け加える。「でも彼は悪い人じゃない」。不満も嫉妬もある、それでもともに生きていく。彼らはまさに身体をおして、彼らなりの仕方、隣にいる他者の存在を了解しているようであった。汗は嘘をつかない。濁っていたのは、「アスリートはこうあるべき」というわたしのまなざしのほうだったか。彼らは今日もペダルを回し続ける、流れる汗を肌光らせながら。



修理をしながら世間話をする選手たち

「石四鳥のスポーツ」の会

梶永真佐夫 民博研究戦略センター

体育会系？

ケンカに強くなりたかった。しかし、社会に飼いやられる前は、周囲に合わせるのが苦手で、頭ごなしに命令されると反発した。体育会に置く身はなく、結果的にボクシングジムにたどりついた。そもそもボクシングジムでは、練習を開始する時間、終わる時間、練習のメニューなど十人十色である。ロードワークや補強運動も各人に任されている。また体重を意識することもあり、ジム生同士が食事などに行くことも少ない。したがって、集団行動を旨とした、学年や年齢の上下に基づく厳格な秩序は醸成されにくい。実際、集団行動の苦手なジム生も少なくない。目的のための訓練には我慢できても、集団本位の規律には我慢できない人が多いのかもしれない。

合同練習か個人練習か

プロボクシングジムの場合、クラブオーナーとしての会長がトップにいる。かつてジムは拳闘会と称されたからである。その下にマネージャーがいて、契約関係に基づいてプロボクサーを監督し試合を組む。マネージャーと契約したトレーナーがジム生の練習を指導する。プロボクサーのみならず、すべてのジム生にとってトレーナーとの相性は重要である。いっぽう、練習時間が重ならない

いジム生とはなかなかつながらない。

もちろん例外もある。たとえばガッツ石松をはじめ五人の世界チャンピオンを輩出した名門ヨネクラボクシングジムには、高校や大学などアマチュアボクシングの部活動と同様に、合同練習の伝統がある。その長所は、技術、練習法、知識、マナーが先輩から後輩へ連綿として受け継がれ、また熟練に応じてトレーナーとしての技術も自然



大正13(1924)年にできた現存日本最古のボクシングジム「東拳ボクシングジム(東京拳闘会)」

に身につけられることである。いっぽう個人練習だと、パンチ力でもスピードでもスタミナでもディフェンスでも手数でも打たれ強さでも肝っ玉でもなんでもいい、自分の武器を磨くことに腐心できる。

「神聖な」リング

日本最初のボクシングジムは、明治二九(一八九六)年にアメリカでの武者修行から戻った斎藤虎之助とジエムス北条が横浜に開いた「メリケン練習所」とされる。「日本ボクシングの父」といわれる渡辺勇次郎(一八八九―一九五六)も、やはりアメリカで一五年におよぶ武者修行を積んだ。大正二〇(一九二二)年に帰国して「ボクシングは体育、精神作興、国際親善、外貨獲得と石四鳥の国家的スポーツである」とうそぶき、日本拳闘倶楽部を創設した。現在のプロ、アマ両組織の祖である。

草創期のボクシングジムのモデルはアメリカにあったろう。だが、いきおい日本独自の特徴も付随した。戦後あたりまでボクシング界でも師範や道場などのことはが通用していた。また、力道山の招聘で来日し、その後六人の世界チャンピオンを育て上げた名伯楽エディ・タウンゼント(一九一四―一九八八)が嘆き呆れたように、教育的指導の名の下に竹刀も多くのジムにあった。伝統武道の道場に擬された「神聖な」リングに対してお辞儀をしてからリングを入りするジムは、今もある。礼とあいさつは、かならず重んじられているのである。

自ら判断する個人の集合―山岳部

南真木人 民博研究戦略センター

ヒマラヤ行きの「洗礼」

学生時代、地方国立大学の体育会山岳部に入っていた。どの大学山岳部も似たようなものだと思うが、山に明け暮れ、年に一〇〇日以上は山にいた。在学した五年間、ついに学園祭なるものを見ることもなく、休みといえば山に出かけ、その先にヒマラヤの高所登山を夢見ていた。

一九八〇年代当時、ヒマラヤ登山は完全に大衆化した時代に入っており、地方の大学山岳部においても既に海外遠征を経験した上級生やOBが数多くいた。膨大な山岳書や最新の海外登山

ジャーナルをもとに、未踏の山や遠征について熱く語るOB、大学山岳部のあいだで交換し合い蓄積された登山計画書や報告書など、山岳部とは登山に係る社会資本をもち、継承する母体だった。山行における登山技術の伝授はもとより、部歌や山の歌を引き継がせ、高所への情熱と経験に浸潤させることが、体育会山岳部ならではの伝統だった。なかでも、入学間もないわたしにとって「洗礼」のような通過儀礼と感じられたのは、カセットテープのクルアーンが流れ、香が焚かれた妖しいOBの部屋で、インド式のチキンカリーを手で食べることだった。まだ見ぬ、憧れのネパールやパキスタンがぐっと身近に感じられ、いよいよ山岳書を読み漁ったものだ。

個を重視する集団

大学山岳部の登山は、山行のリーダーに統率された団体スポーツのように映るかもしれない。だが、登山の基本は個人の判断と責任にある。ときには生命の危険と隣り合わせになる登山では、暗黙の裡に、冬山合宿への参加においても無理強いされず、自発性が重んじられた。そのため女性も入部でき、個人の能力と欲求に見合う活動が許される緩さもあつた。他方、入学年に基づく上下関

係は、大学のゼミに見られるくらいにはあつた。だが、背負う荷物の重さは平等で、一通りの経験をした二〜三年生にもなると、山行に対して意見や提案が出せる風通しの良さがあつた。

海外遠征においても、たとえ固定ロープを張りキャンブを延ばしていく旧来の「極地法」を採用しても、一握りの選ばれた登頂者のために、他の人は献身的に荷揚げに徹するといった、かつてのような発想はもはやなかった。個人が駒としてではなく、自発的かつ主体的に登山にかかわることが当然視されていたのである。逆にいえば、団体スポーツが得手ではない、悪くいえば気儘な、良くいえば個性的な個人が寄り集まり、目的と活動をシェアしているのが体育会系の山岳部だった。

「未知の地域に道を求め、未踏の高峰を目指して着々と準備を整え、遂に目的を実現するに至る全過程は、学問の研究によって新しい知識が確立される過程に実によく似ている」(一九八〇年アラカンリⅢ報告書)。これは弘前大学山岳部の元顧問である明石誠教授のことばだが、ヒマラヤを目指す集団として、荷物の軽量化、食事と栄養、装備の選択、高所医学と順応、気象学、登頂の戦術果てはヒルや感染症の対策まで、研究する課題は多かつた。それらを最新の情報をもとにやり尽くしても、遭難や事故はゼロにはならない。そうした現実を踏まえて万全を期し、その都度、総合的な判断をしなければならぬのが山であり、登山という活動だ。体育会系の山岳部は、じつは精神的というより科学信奉的であり、団体というより個を重視する集団なのである。



五竜岳から鷲岳を望む。親不知まで縦走中(1984年)